

# KELES Newsletter

## 関西英語教育学会報 2020年度 第4号

事務局：〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1

大阪教育大学 教育学部 教員養成課程 橋本健一研究室内

E-mail: kelesoffice@gmail.com 学会ウェブサイト: <http://www.keles.jp/>

2021年3月26日発行



### 巻頭言

### 探求型の読書

関西英語教育学会 (KELES) 副会長 横川博一 (神戸大学)

「若者の読書離れ」というような言い回しは嫌いだ。そう思っているいろいろ調べてみると、こうした言説は、すでに1970年代あたりから現れ、今に至るまでややゆがめられた形で常態化している。2005年ころを頂点にそれまで増加傾向であった読書時間が減少に転じたのは確かなようだが、大人に比べて若者の方が読書時間が長いことは昔も今も変わらず、読書離れは若者にかぎった話ではなく大人も同様なのである。

文科省がまとめた『子供の読書活動に関する現状と論点』によれば、小学生 (4.0%) や中学生 (15.4%) に比べて高校生 (57.1%) の不読率は、きわめて高い数字となっている。高校生が本を読まない理由は、「ほかの活動等で時間がなかったから」「他にしたいことがあったから」「ふだんから本を読まないから」が大勢を占める。「他にやることがあって忙しい」などというのは、大人が言い訳によく使う常套句だ。本当はそうじゃないだろう(笑)。

自分のことを振り返ってみれば、10代のころは決して読書好きではなかったように思う。それでも今に比べれば昔は書店がたくさんあったから、学校の帰り道には書店によって本をさがすのは日常であった。少ないながらも夢

中になって本を読んだ記憶があるのは、手塚富雄『いきいきと生きよーゲエテに学ぶ』(講談社新書)だ。高校の『現代文』の教科書の冒頭の課にあったのがきっかけだ。ゲエテが語り掛ける短いことばとそのメッセージの背景にある深みに魅了されたことをはっきり覚えている。それをもっと読んで知りたくなったのだ。だからと言って、その後に出てくる芥川龍之介『羅生門』を自分で手に取って読むことはなかったが(笑)。そう言えば、立花隆『田中角栄全研究(上・下)』(講談社)をはじめロッキード事件にかかわる本や過去の新聞記事を集めて夢中で読んだのも高校1年のときだった。一冊の本がまた別の本や資料へとつながって行って、同時に、自分の中の知識の空白が埋められ、あたらしいネットワークが創られていくことが、たまらなく面白く感じた。そのきっかけは、高校の『現代社会』の授業だった。教科書に書かれていることをそのまま解説されるような先生ではなかった。自ら問題を設定させて、それについて調べ、発表させ、そのうえで教科書にふたたび戻ってくるというスタイルの授業だった。先生が書く板書をノートに写してそれを覚えていくことに慣れ親しんでいる者にはショッキングなスタイル

だったが、すんなり受け入れることができた。いや、それどころか、がぜんやる気がでたことを鮮明に覚えている。先生にとっても勇気のいる冒険だったに違いない。しかし、それが知的好奇心が喚起されるとしても面白い有効な方法だということも知っていたに違いない。

今風に言えば、「探求型の読書」がそこにあった。今は、仕事柄、学術論文を読む時間が圧倒的に長い、最初のイントロダクションから、先行研究をまとめた箇所はとくにおもしろい。研究論文だから、そこには事実が淡々と描かれているだろうと思ったら大間違い。そこには、先行研究をどう整理、理解し、どう新しい課題を見出したのかが語られる。著者らが創り出したストーリーをたどるのは、随筆や小説を読むのと同じようにワクワクする読書なのだ。

そんなワクワク感満載の読書が、今、あらためてだいじな時代になっていると思う。たんなる情報の検索で終わらず、自分の関心を創出するための読書、そしてその考えを前に進めるための読書、そんなワクワクするような読書を体験するならば、子どもたちも大人も、寸暇を惜しんで読書をするに違いない。そんな体験が英語の授業でも当たり前のこととしてとらえることができれば、いろんな問題が解決されていくように思う。

こんな本をお勧めしたい：編集工学研究所編(2020)『探求型読書』(クロスメディアパブリッシング)。ある学会の会誌編集委員長を務めていたころ、会誌の巻頭インタビューのために、東京にある「編集工学研究所」を訪ねたことがある。そんな経験がなければこの本も手に取ることはなかったかもしれない。

## 報告 関西英語教育学会 第24回 卒論・修論研究発表セミナー

開催日：2021年2月11日（木・祝） オンライン開催

標記セミナーが、大学英語教育学会関西支部と外国語教育メディア学会関西支部の共催にて開催されました。現下の社会情勢を鑑みて、年次大会・セミナーに続きオンラインでの開催となりました。研究発表は合計8件（発表者・タイトルはセミナーウェブサイト ([http://www.keles.jp/news/keles24\\_thesis/](http://www.keles.jp/news/keles24_thesis/)) 参照) で、例年より数は少なくなりましたが、研究活動自体が難しい中（だからこそ!?!）工夫が凝らされた力作が揃いました。コメンテーターの先生にも今回はお一人1件のコメントをしていただくという豪華さで、様々な形態でいつも以上にディープなコメント・激励をいただけたように思います。またランチョンセミナーでは3名の現職の先生からお仕事をする上で考えることや学生・院生時代の研究がどう活かされているかについてお話いただき、多くの学生・院生の参考になったことと思います。

スペシャル・トークでは筑波大学の卯城祐司先生をお招きして、「めざせ、英語教育「虎の穴」：卒論、修論、もちろん博論」というタイトルで講演をしていただき、様々なフィールドで活躍する人材を多く輩出する学生・院生指導やゼミ運営等について、惜しみなくご披露いただきました。KELES元会長の村田純一先生や理事の長谷尚弥先生などとの軽妙なやりとりを交えつつのトークは文字通り「あっという間」でした。

お忙しい中貴重なお話をさせていただきました卯城先生、発表者に様々なご助言をいただきましたコメンテーターの先生方に心から御礼申し上げます。また日本全国から約130名の方に事前参加登録をいただいております。ご参加くださった皆様に御礼申し上げます。来年度も多くの学生の皆さん、先生方が関わって下さることを期待しております。

＜スペシャル・トーク報告＞  
「めざせ、英語教育「虎の穴」：  
卒論、修論、もちろん博論」  
筑波大学 卯城 祐司 先生

100名をゆうに超える院生指導のご実績と、息つく間もないほどのpublication recordで知られる卯城先生を講師にお迎えした今回のスペシャルトーク。ベストを尽くして研究発表に臨んだ学部生・院生さんたちの前途を祝し、極めて前向きなご講演を戴きました。トーク中は本日の発表者や参加者にも頻繁にパスが飛び、楽しくも常に頭を刺激されたのが印象的でした。卯城ゼミの学生さんたちのご活躍も、今日のように綿密に仕込まれた授業・ご指導の賜物であるところが垣間見えた気がします。

様々なクイズを通しての自己紹介に始まり、絶妙なタイミングで本論の研究に入ってゆく様子は、さすがリーディング指導の大家ならではのテクニックだったかと思いました。内容理解の部分では、学生さんへのご指導について、具体的なゼミの運営方法や文献のまとめ方など、学生・教員の両サイドから有益な情報を惜しげもなく披露してくださいました。個人的には、「ゼミ資料のまとめ方」は、学生・院生としての心構えとしてだけでなく、小中高の教員として研究授業等をする際の指導案や、共同研究チーム内での情報共有等にも通じるもので、非常に勉強になりました。後半にはフロアからの質問タイムがとられ、「現任教員としても研究を続けてゆくtips」や「ゼミの運営方法・学生指導について」など学生・教員からの様々な質問へ回答されていました。

また、最後の教え子さんとのやりとりからは、改めて、先生の暖かみを感じられました。生徒や学生はこちらの思惑通りに育てられませんが、やはり教員の所作を見て感じて、また関わり合う中で大人になっていくものなのだと、画面越しの参加者全員へ伝わっ

たことでしょう。

以上、あっという間のスペシャルトークでしたが、まとめるには情報量が多く、この文章を書きながらも未だ苦心しております。ただ一つ確かなことは、研究者としても教育者としてもまだまだ日の浅い自分は、虎の穴で生き残るべく必死にもがき続けるしかないということでしょうか。

(報告者：関西大学第一高等学校 山形 悟史)

＜発表者体験記＞

首藤 紗果 さん (大阪教育大学 教職大学院)  
KELES第24回卒論・修論研究発表セミナーでは、在籍している教職大学院の実践課題研究報告書に基づいた実践研究の内容を発表させていただきました。このような学外・外部での発表に挑戦するという事は、自身の研究を振り返る良い機会になったと感じています。特に、英語教育に精通する先生方や学生の皆さんからいただいた研究に対するコメントや質問は、今後の研究に生かしていきたいと思えます。私は小学校での授業実践を中心として研究を進めてきましたが、今回のセミナー参加を通して、研究においては理論と実践双方のバランスが重要だと再認識しました。自身の研究に関しては、授業実践における分析方法を見直していきたいと思えます。

セミナーの最後には、卯城先生のご講演も拝聴することができ、実りの多い一日となりました。提示された例をもとに、リーディングにおけるつまずきや解決策を他の参加者の皆さんと一緒に考えたり、学生・院生・教員がどのように研究に取り組んでいるのか(取り組んでいけるのか)を知ったりすることができ、大変興味深い内容でした。



## 学会事務局からのお知らせ

### ◆学会費納入のお願い

新年度を迎えるにあたり、2021年度学会費納入をお願いいたします。詳しくは、同封のお知らせをご覧ください。

2020年度分の学会費が未納の方は納入をお願いいたします。2020年度分を2月末までにお支払いいただいていない場合には、8月に開催の全国英語教育学会第46回長野研究大会での発表ができませんので、ご了承くださいませ。

### ◆2021年度関西英語教育学会（第27回） 研究大会のお知らせ

標記研究大会が以下の通り開催されます。社会情勢を鑑みまして、2021年度もオンラインで開催いたします。

日時：2021年6月12日（土）・13日（日）

開催形態：オンライン（Zoom利用予定）

年次大会特設ウェブサイト：

<https://sites.google.com/view/keles2021/>

研究発表、公募ワークショップ、公募フォーラムを募集中です。発表申込締切は4月20日（火）です。詳細は同封の発表募集チラシ、特設ウェブサイトをご覧ください。

#### 【講演（13日午後）】

「英語授業における発問づくり：  
教科書本文をもとにした教師と生徒の  
英語によるコミュニケーション」  
講師：田中武夫先生（山梨大学）

この他セミナー・ワークショップを鋭意企画中です。詳細が決まり次第随時特設ウェブサイトにてお知らせいたしますので、ご確認をお願いいたします。

### ◆全国英語教育学会第46回長野研究大会

開催延期となっておりました標記大会が以下の通りオンラインで開催されます。多くの皆さまにご発表・ご参加いただければと思います。詳しいご案内につきましては4月中旬をめどに皆様に郵送でお送りいたします。全国の会員ではないという方も、場所を選ばないオンライン開催ということもございますので、ぜひ参加をご検討くださいませ。

日時：2021年8月7日（土）・8日（日）

開催形態：オンライン

### ◆各種お問い合わせフォームについて <http://www.keles.jp/>

GoogleFormsを用いたお問い合わせフォームを設置しております。下記に関するお尋ね・ご連絡はそちらから事務局にお問い合わせください。

学会費・学会誌・研究大会・各種セミナー・入退会・会員情報の変更・その他学会全般に関するお問い合わせ

### ◆編集後記

恒例の卒修論セミナーが無事終了して、KELESの2020年度もひと段落です。年度末の多忙なところ短期間での準備に尽力して下さった幹事の皆様のおかげでスムーズに運んだことと思います。紀要SELT、並びにKELESジャーナルも予定通りこのニューズレターに同封されているはずで、編集にご尽力いただいた先生方に心から感謝申し上げます。「例年」「予定通り」ということが決して当たり前ではないことを強く再認識しています。KELESがいつもの活動を続けていけるのも、様々な形で関与して下さる会員の皆様のおかげです。2021年度もどうぞよろしくお祈りいたします。（KH）